「つたえること・つたわるもの」№202

〈いのち〉と〈からだ〉の社会学4
ホメオパシー　その１
〈からだ〉・〈こころ〉・〈いのち〉、人間をまるごと癒す「場のエネルギー」

健康ジャーナリスト　原山建郎

今回と次回は、「ホメオパシー療法」を日常の診療にとり入れ大きな効果を挙げている二人の医師を紹介します。今回のコラム№202では「ホメオパシーその１」として帯津良一さんを、次回コラム№203では「ホメオパシー　その２」として中村裕恵さんの取り組みをとり上げます。

これは、かつて私が雑誌『財界人』に書いた連載企画「医療ルネッサンス」をもとに、拙著『あきらめない！もうひとつの治療法』(厚生科学研究所、2006年）に収めたものです。再掲・引用部分は青字表記にしました。文中のむずかしい医学用語には、カッコ内に※印の解説を加えました。東洋鍼灸専門学校の授業（社会学）でも、全文を資料として配布しました。なお、取材時期は、2004～2005年ごろで、文中の肩書、病院名などは取材当時のものです。

はじめに――
「ホメオパシー（超希釈物質）」とは

日本ホメオパシー医学協会ホームページによれば、「ホメオパシー（超希釈物質）」療法とは、今から200年前、ドイツの医師ハーネマンがその生涯をかけて確立させた「自己治癒力」を使う同種療法をいいます。

それは「症状を起こすもの（物質）は、その症状を取り去るものになる」という「同種の法則」が根本原則であり、ホメオパシーは「同じ」という意味のギリシャ語「ホメオエ（homeoeo）」と「病気」を意味する「パシー（pathy）」を合わせた言葉で、近代西洋医学のように、症状を抑え込む療法とは正反対の、「症状には同じような症状を出すものを天文学的に希釈振盪（※物質を極限まで薄めた液体を、激しく揺り動かして）して与える」という「同種の法則」に基づいています。現れた症状は体からにしろ、心からにしろ、必要があって表出して（あらわれて）いるのであり、同種療法によって症状を出し切ることが治癒につながるという考え方をとっています。

◎「からだの部分ではなく、つながりを診る医学が必要です」

ここ数年、ホリスティック（全人的、全包括的）医学、オルターナティブ（代替）医学、ホメオパシー医学、中医学（中国伝統医学）など、主に肉体の病気を中心にした現代医学に対して、「からだ・こころ・いのち」のつながりを重視する治療概念が見直されるようになった。

ガンの治療などにさまざまな代替療法を駆使してきた帯津三敬病院名誉院長、帯津良一さんを取材した。

★敏腕の若手外科医が悩んだガンの再発率

「1970年代は、医学が輝いて見えた時代でした。たとえば中心静脈栄養、あれはすごかった。当時、食道がん手術で縫合不全を起こすことがあり、食べられない患者の栄養管理にとても苦労しました。腸瘻（栄養を外部から注入する穴）を作っても、どんどん栄養状態が悪くなり、手術は成功したのに亡くなるというケースが少なくなかった。中心静脈栄養を始めてからは、少々漏れても、必要な栄養補給が可能になりました。

もう一つ苦労したのが、術後の呼吸不全です。たとえば胸を開ける食道ガンの手術では、手術に要する時間が長く、肺合併症を起こしやすいので、とても大変でした。それがＩＣＵ（集中治療室）ができ、欧米のレスピレーター（人工呼吸器）が導入されてから、ずいぶん楽になりました」

1975年、東京都のがんセンターのような形で、新しく設立された都立駒込病院に勇躍赴任した帯津さんは、専門である食道ガンの手術に腕をふるう。年々新しく開発される医療機械や抗ガン剤など、日進月歩の勢いをまのあたりにして、いつか人類がガンから解放される日がくる、そう信じて疑わなかった。40歳といえば、いちばん油が乗った時期である。将来を嘱望された外科医の未来は、ばら色に輝いているかに見えた。

しかし、手術の腕は着実に上がり、術後管理も行き届いて、手術によって死亡する患者数は減っているのに、なぜかガンの再発率は少しも下がらない。ガンが再発して再入院してくる患者の数はちっと

も減る気配がないのだ。これは、どういうことなのか。帯津さんは過去50年間に遡って、アメリカの医学雑誌を調べてみた。ところが、この50年間、ほとんどガンの治療成績は変わっていない。これほど医学が進んでいるというのに、ガンを治すほうには貢献していないのだ。

★つながりを診る医学、中医学と気功の魅力

現代の西洋医学には限界があるのではないか、帯津さんはそう思い始めていた。

「たしかに、西洋医学はこの百年の間に、目覚しい進歩を遂げて一大医学体系を築き、人類はその恩恵に浴してきた。しかし、それはあくまでも、からだ、身体性を対象にする医学でした。

その西洋医学が大きな壁にぶち当たったように見えるのは、振り子の分銅が身体性・肉体（フィジカル）の方向に振り切って、こんどは精神性・霊性（スピリチュアル）、こころ、いのちのほうに振り出す時期がやってきているのだろうと思います」

西洋医学はからだの部分を診るのは得意だが、すぐ隣りとのつながりを見落としやすい。これにつながりを診る医学を合わせれば、もっとうまくいくのではないか。つながりを診る医学といえば、これは「陰・陽」、「木・火・土・金・水」の組み合わせやつながりで、すべての現象が説明される「陰陽五行説（※中国医学の基本概念）」を学ぶにしくはない。幸いなことに、東京都が姉妹都市・北京から見学の医師団を受け入れていた縁もあり、1980年秋、半月ほど北京と上海の病院を回って、がんの治療に中国医学（中国の伝統医学）がどのように使われているか、その実際をつぶさに視察するチャンスが訪れた。

「ちょうど中西医結合（中国の伝統医学と西洋医学のよいところをとり入れる、国の政策）が始まったころでしたが、中国医学に関する知識が私にはまだ乏しく、これといった収穫はありませんでした。

ところが、ガンに対する補助療法に用いる気功を見たとき、これだと、ピーンときました。昔から武術（空手・柔術）をしていたので、これを患者さんにやってもらえばいいのだと、直感的にひらめいたのです」

そこで、気功の本をたくさん買い込み、早速、気功を勉強した帯津さんは、病院でも気功を勧めてみたものの、どうも患者の反応が鈍い。まだインフォームド・コンセント（告知と同意）もない時代で、自分はガンだと知らない患者の手術が終わって、やれうれしやと思っているところに、主治医から気功を勧められたので、面食らってしまったのである。

★「いのち」の本体は、生命場のエネルギー

1982年、自分が理想とするホリスティックな医療の実現をめざして、帯津三敬病院を故郷・埼玉県川越市にオープンする。漢方薬、鍼灸、気功、食事療法の四本柱に、これまでやってきた西洋医学を加えた医療の実践活動は、ことしで22年目（※2004年時点で）を迎える。

この病院では、治療法を選択するとき、患者の意見をいちばんに尊重する。さまざまな民間療法、民間薬、サプリメントなど、患者が希望する代替療法についても、選択肢のひとつとして検討される。別棟に健康道場も併設され、とくに毎週金曜日には、「名誉院長講話（30分）と気功実習（15分）」を楽しみに集まる患者、元患者、家族たちでいっぱいになる。

「私はホリスティック医学というものを狙って、人間まるごとの医療をめざしてきました。そのなかで、からだ・こころ・いのち、この三つが分けられない状態でぴしゃっと作用し合い、ひとつの複合体になっている状態をつかまないと、本当のホリスティックではないと思います。

ところが、実際には分けないとやれない。それぞれに働きかけて治療する方法をひとりの患者さんに重ね合わせて、なんとか人間まるごとをとらえようとしています。からだは目に見える肉体ですから、いままでの科学技術で分析が可能です。目では見えないこころ・いのち、これをどうとらえるかというときに、それは場のポテンシャル、場のエネルギーだろうという思いを、最初からもっていました」

私たちはいま、電磁場のなかで生活している。からだのなかにも当然、電磁場がある。重力場もある。最近よく話題になる「気」にしても、まだ

科学的な証明はされていないが、からだのなかで気の場を作っている。それらすべてをひっくるめて、帯津さんは「生命場のエネルギー」と呼んでいる。

「生命場のエネルギーというものが、いのちであり、このエネルギーが何らかの理由で下降したときに、それを回復する能力、その場に備わっている力が〝自然治癒力〟だと思います。

また、他からの働きかけで回復することを〝癒し〟といって、手術など機械の修理のような〝治し〟と区別しているのでしょう。同じように、自分の意思で回復しようとする努力を〝養生〟というのではないでしょうか。ホリスティック医学とは、場の医学であり、自然治癒力の医学である。また、癒しの医学であり、養生の医学である、私はそう考えています」

★ホメオパシーの「不思議な」効き目

あまたある代替療法の中で、帯津さんがとくに力を入れているのが、ホメオパシーだ。ヨーロッパで200年の歴史をもつホメオパシーには、「似たものが、似たものを治す」「最小有効量を用いる」という二つの原理がある。

たとえば、タマネギから作ったアリウム・セパというレメディ（ホメオパシー薬）は花粉症の治療薬だが、本場のイギリスでは花粉症患者の約15%がこのレメディを飲んでいるといわれる。タマネギを刻むと、鼻水が出てきて、涙が止まらなくなる。この「似たものが、似たものを治す」という第一の原理は、健康な人に「そういう症状をもたらす」もの（物質）を、現実に「そういう症状で困っている」人、つまり鼻水と涙が止まらない花粉症患者に対して、タマネギのレメディを治療薬として与える。

なぜこのような現象が起きるのだろうか。ホメオパシーを創設したハーネマンの解釈によると、あらわれた症状というものは、それに対して生命力が打ち勝とうとして起こす現象であり、同じ症状をもたらすものをさらに上乗せすると、生命力はもっと働こうとする、それが効き目を何倍にもする。

しかし、これだけでは問題解決にはならない。刻んだタマネギをアルコールに漬けて、それを漉した液を花粉症患者に与えると、アグラベーション（症状が一時的に悪化すること）が起きて、いまある症状（鼻水と涙）が強く出てしまう。もちろん、生のタマネギを食べても、はげしいアグラベーションが出てしまう。

そこで、ハーネマンはこのアグラベーションを避けて、治療効果だけを高める手立てはないものかと考え、これを薄める方法を開発した。それが「最小有効量を用いる」という第二の原理で、タマネギを漉した液（母液）をまず100倍に薄め、それをまた100倍に薄める、これを30回繰り返して、30Ｃという標準濃度の希釈液を作ったのである。ホメオパシーの30Ｃ希釈液は100の30乗回の希釈を繰り返すので、もう１分子も入っていないも同然である。

それなのに、なぜ効くのか。プラシーボ効果（※見た目や味などが本物の薬そっくりに作られている薬理効果のない偽の薬を服用しても、本人に「効く」という思い込みや期待があるために、症状が改善される現象）だというのが西洋医学側の言い分で、それに対してホメオパシー側は「物質性を排除して、残った場のエネルギーが効く」と主張するのだが、ここはレメディを治療に用いる帯津さんの解説を仰ぐことにしよう。

「**ホメオパシーは場の医学**ですから、ホリスティック医学をめざす者として避けては通れないと思って、勉強を始めました。これは小さな粒（乳糖）に、レメディの液がまぶしてあるのですが、それを飲み込むのではなく、口のなかで吸収させるだけ、これほど身心にやさしい方法はない。お腹が痛くても、咳がひどくても、吐き気がしても、口のなかで１～２分で溶けるので、どういうときにでも使えることが、とくにガンの患者さんに歓迎されています」

★余分なエントロピーを捨てて、適正なエントロピーの水準を復元する

初めて帯津さんが中西医結合を視察したころ、１人の患者を前に、西洋医学と中医学の医師が、２人で診察して、それぞれの意見を述べながら相

談するようすを見て、内心で、これでは治療の実はあげにくいと思っていた

基本的には一人の医師が西洋医学と東洋医学（中国の伝統医学）、両方の知識と技術をもって、それを診断や治療の場で並存させるほうが望ましいのだという。

「スタンスの違う二つの医学を、同時に行えるわけがないと言われました。私はだからこそ、いっしょに行う価値があると考えました。エントロピー増大の法則（※エントロピー＝無秩序さの度合い。秩序だった状態ほどエントロピーは低く、乱雑な状態ほど高くなる。たとえば、机の上が整理されている状態はエントロピーが低く、散らかっている状態はエントロピーが高い。外部とエネルギーをやりとりしない「孤立した」系では、無秩序さ＝エントロピーが自然と増えていくという物理学の法則）というものがありますが、生命活動によって生じた余分なエントロピーを捨てて、適正なエントロピーの水準を復元する、それによって日々溌剌とした状態が維持できるのです。この増大したエントロピーをいかにじょうずに捨てるか、瀉の概念（※体内に溜まった病気の原因となる邪気を体外へ排出したり、過剰な状態を軽減したりする）に注目した排泄の医学、それが中国医学であり、一方ではエネルギーの変換（代謝）をうまくはかる、それが西洋医学です。生命現象のエントロピー的な面と、エネルギー的な面を同時にとらえる、それが私の考える本質的な意味での中西医結合なのです」

〈からだ〉については西洋医学、〈こころ〉については心理療法、〈いのち〉についてはまず中国医学、ついでホメオパシー医学、各種のサプリメントなど、あらゆる手段を駆使しながら、とともにガンと闘う戦友として、帯津さんは患者のいのちに、まっすぐ向き合っている。

★大きな循環のなかで、生きつづけるいのち

「私の病院は重症の人が多いですから、亡くなる患者さんもある。みなさん、私を頼ってきてくれる人たちですから、最期のときはできるだけそばにいてあげることを、私の方針としてずっと通していました。そのときにどうもね、患者さんの表情を見ていると、これは次の世界に旅立っていくという感じをもつわけです。

いのちというものが生命場のエネルギーだとして、それは皮膚で閉ざされ孤立した状態ではなく、外界とつながっている。

いのちのエネルギーは、外界のエネルギーとも交流がある、お互いに影響しあっている。外界はどこまでもいくと、宇宙のはて、虚空まで広がっていきます。死んだときの、いのちはどこへいくのだろう。肉体は滅びるけれども、生命エネルギー場は生じたり滅したりするのではなく、あるがままの状態で循環しているように思います」

帯津さんは、死はたいせつな通過点であるという。死の迎え方、いのちのとらえ方について、患者ともよく話をする。この世にあるときだけが現実で、（死んでしまったら）あとは何もないという考え方もできるが、大きな循環のなかで、この一日も循環なのだから、大事に生きたい。いまの生き方が、死んでからの生き方につながっていくというのだ。

ところで、新たに帯津三敬塾クリニックを開設した理由のなかには、治療の場としてのクリニックだけでなく、「帯津三敬塾」のセミナー開催がある。この５月には、英国グラスゴウからホメオパシーの専門医を招聘して、第１回目のセミナーが開催された。

これらのセミナーを受講した多くの医療者が、ホリスティック医学の実際を学ぶとともに、その場のエネルギーを体験してもらって、そのエネルギーをそれぞれの病院や職場に持ち帰ってほしいという願いが込められている。

「医療という場には、患者さんがいてご家族がいて、友人や先輩後輩がいる。医者、看護師、薬剤師、鍼灸師、心理療法士などの医療者がいる。そういう人たちが作っている場のエネルギーを高めることで、患者さんだけでなく、縁あってその場に居あわせた、ひとり一人が癒されていく。それが本当の医療だと私は思います」

眼鏡の奥で、柔和な双眸がさらに細くなり、とびっきりの笑顔が輝いて見えた。

（『あきらめない！もうひとつの治療法』66～75 ページ）